

吉井勇の歌集『神杉』『金泥』のことば

南里 一郎

吉井勇の歌集『神杉』『金泥』は、昭和二十年の太平洋戦争終結を挟んだごく短い期間に、作者自身が旧作から歌を選び、編纂したものである。『神杉』は叢書〈決戦歌集〉の一冊として、『金泥』は叢書〈新日本歌集〉の一冊として企画された。両者は成立時期や企画の関係から相違点が大きく、まったく趣を異にする歌集である。まず、両者について理解するために、成立事情、出典となった歌集、歌題、構成について、先行文献を参照しながら確認し、記述する。

ついで、両者の歌に含まれる語句の偏りについて記述する。『神杉』では戦時を意識させる語、『金泥』では芸術に生きた古人の名が頻出している。それぞれの企画意図に沿ったことによる、表面的な相違であるといえる。

さらに、そうした相違点はさておき、二つの歌集に共通する部分を探る。「巻後に」がほぼ同じであることのほかに、「こころ足る」歌群の三首では戦中と戦後とで共有される感情がある。さらには「なごやかさ」「しづけさ」を詠んだ歌に、企画意図にとらわれない作者の意識の表出がある。作者自身が認識していたか否かは不明であるが、齢六十となった老歌人が「たたかひの世」にあつて求めていたものは、長い時を経て継承され変わらぬ文物のように、わが国が穏やかに落ち着いた状態にあつてほしいという願ひだった。

一 本稿の目的

吉井勇（明治十九年一八八六―昭和三十五年一九六〇）には、昭和二十年（一九四五）の太平洋戦争終結を挟み、ごく短い期間に自撰した二つの歌集がある。『神杉』と『金泥』である。

本稿は、まず、この『神杉』『金泥』の歌に含まれる語句の偏りについて記述することを目的とする。先に成立した『神杉』の頻出語を抽出し、歌集の内容について検討する。ついで、『金泥』に偏る語彙と、両者に共通した要素について検討する。

『神杉』と『金泥』とを比較する意図について略述しておく。両者の歌の内容が異なることは明らかであるが、成立時期や成立事情から、関係が深いこともまた明らかである。どこがどう

異なっているか、また同じ要素があるかどうか、同じ組上に載せ、統一的視点から検討したい。

この両者の編纂は、昭和二十年の夏から初秋にかけてのごく短い期間をおいて行われた。この事実だけでも関係の深さが想定され、さらに既発表の歌から作者自ら選歌し編纂したという共通点がある。いずれも百八十余首の歌を収め、ほぼ同規模とってよい。選歌対象としては、いずれも昭和十八年、十九年に刊行された歌集が中心となった。しかも、企画した版元が同じである。

こうした共通点のある二つの歌集であったが、両者はその選歌時期によって、性格を異にすることとなった。すなわち、『神杉』は敗戦直前の七月末に、『金泥』は敗戦すぐの八月下旬以降に編纂されている。時局が大きく変化したが、二つの歌集に含まれる歌を大きく変えることになった。

このように、関係が深いことも、性格が異なることも明らかにな二つの歌集である。そこで、とられた歌の異なる点の把握は、作者の意図を考える上で必要である。違いを確認することで、共通している点をすくい上げること可能になるとと思われる。

なお、『神杉』の本文については、田坂・南里・福田(二〇二〇)で全体を紹介した。『金泥』の本文も田坂(二〇一九)

に掲出されている。

二 『神杉』『金泥』の成立事情

本節では、歌集『神杉』『金泥』の成立の経緯について略記しておく。両者の内容を理解するために必要である。以下、田坂(二〇一九)、田坂(二〇二〇)からの要約である。詳細はそちらを参照されたい。

■ 『神杉』

昭和二十年六月ごろ、東京の八雲書店は〈決戦歌集〉なる叢書を企画し、吉井勇ら十二人の歌人に自作からの選歌を依頼した。吉井は七月末に依頼を受け、『神杉』という標題の歌集を編纂し原稿を送付した。しかし、八月十五日の敗戦のため刊行に至らず、原稿だけが残った。⁽¹⁾

■ 『金泥』

昭和二十年八月の敗戦後まもなく、八雲書店は〈新日本歌集〉なる叢書を企画し、ふたたび歌人らに自作からの選歌を依頼した。吉井は『金泥』という標題の歌集を編纂し、こちらは昭和二十年十一月に刊行された。

以上のように、終戦直前の叢書〈決戦歌集〉の企画は実現し

なかったが、戦後の時局に応じた新たな叢書（新日本歌集）という形で生まれ変わることになった。

三 『神杉』『金泥』の歌の出典

『神杉』『金泥』いずれも、既発表の歌を集めた歌集であることはすでに述べた。そこで、それぞれの出典、すなわち選歌対象となった歌集ととられた歌数を示しておく。

なお、本節は、田坂（二〇一九）と田坂・南里・福田（二〇二〇）における作業を再確認し、今回行った作業を加えて構成しなおした資料である。必要に応じてそちらも参照されたい。

■ 『神杉』一八八首の出典

歌集『朝影』から56首

歌集『霹靂』から59首

歌集『玄冬』から72首

雑誌『高志』から1首

■ 『金泥』一八三首の出典

歌集『朝影』から34首

歌集『京洛史蹟歌』から94首

歌集『玄冬』から53首⁽²⁾

自歌自釈『恋ぐさ』から1首（『故園』にも重出）

雑誌『高志』から1首

右で見るように、部分的に同じ歌集が選歌対象とされているものの、とられた歌で共通するのは四首のみ、『朝影』からの三首と『高志』からの一首である。この四首については後述する。

以下、とられた歌数の多い四つの歌集について、版元・刊年・内容について略記する。歌題やとられた歌数も示す。

▽歌集『朝影』（墨水書房、昭和十八年一月）

歌集の後記によると、昭和十六年二月から昭和十七年五月までの歌を収めたという。九章に分けられ、六三の歌題がある。歌数六三三首。

章立ては以下のとおり。とられた歌のあるときは、その章の下に、当該歌のある歌題を記した。とられた歌数と『神杉』『金泥』の別も示した。

・ 比叡懺法 「山氣蕭殺」から7首（神杉）

・ 洛北籠居 「こころ足る」から6首（神杉）

「こころ足る」から23首（金泥）

・ 京洛往来 *選歌なし

・ 御民吾 「国を思ふ」から6首（神杉）

「大詔を拝す」から6首（神杉）

「捷報来」から4首（神杉）

「壬午新春」から11首（神杉）

「炉辺の歌」から5首（神杉）

「暁闇端座」から5首（神杉）

「軍神を思ふ」から5首（神杉）

・鑑賞余響 「大雅堂羅漢図」から11首（金泥）

・近畿遊草 *選歌なし

・続草廬漫歌 *選歌なし

・土佐路の旅 *選歌なし

・信濃路の旅 *選歌なし

▽歌集『霹靂』（一 條書房、昭和十八年十一月）

歌集の「巻後に」に、「昭和十六年十二月から翌十七年十一月に至るまで、一年間の歌日記である」とある。新聞『中外日報』に連載されたものに歌を加えたもの。一三七の歌題に五首ずつの歌を収める。歌数六八五首。

前述のように、『神杉』がとるのみで『金泥』にはとられていない。歌題が多いので、『神杉』にとられた歌がある題のみを示す。括弧内の数字はとられた歌数である。

大詔渙発（3） 馬采冲海戦（2） 正義の師（3）

防人の歌（4） 香港陥落（1） 新年の雪（3）

心の友（3） 大詔奉戴（4） 南洲遣訓（3）

明治神宮（4） 祖先の墓（5） 神武天皇祭（3）

南方の友（3） 豆腐の歌（5） 熱田鳴神（5）

印度を思ふ（4） 天竺路次所見（1） 虫声唧唧（4）

▽歌集『京洛史蹟歌』（大雅堂、昭和十九年二月）

『霹靂』『玄冬』と同時期の歌と見てよいか。標題からは寺社や史跡の巡歴による歌を主とするようだが、その下地には愛国精神が溢れているとみえる。歌集の後記に「結局この歌集は或る意味に於て、偉大なる聖戦に対する、貧しい私の捧げ物なのである」とある。木俣修は、「尽忠報国の精神をこうした歴史的人物の顕彰のなかにこめたといった態のもの」（吉井勇全集第三卷解説）という。

六章に分けられ、四八の歌題がある。歌数五〇七首。

章立ては以下のとおり。『朝影』で示したのと同様に、とられた歌のある章の下に、当該歌のある歌題を記し、とられた歌数も示した。前述のように『金泥』のみにとられている。

・神社参拝 *選歌なし

・楠公遺芳 *選歌なし

・織豊時代 *選歌なし

・古寺巡歴 「大徳寺」から10首、「千利休」から7首

・維新史跡 *選歌なし

・芸文遺跡 「鷹ヶ峰」から14首、「本阿弥光悦」から9首

「真葛ヶ原」から6首、「大雅堂」から9首

「栖鳳の冬」から10首、「神光院」から7首
 「蓮月抄」から7首、「富岡鉄斎」から5首
 「落柿舎」から10首、

▽歌集『玄冬』（創元社、昭和十九年六月）

歌集の後記には「昭和十七年六月以降昭和十八年十月までの作品を集めたもの」とあるが、木俣修は、「十六年末あるいは昭和十七年はじめのころの作品からはじまっている」という（吉井勇全集第三巻解説）。八章に分けられ、八四の歌題がある。歌数七一九首。

章立ては以下のとおり。『朝影』で示したのと同様に、とられた歌のある章の下に、当該歌のある歌題を記した。とられた歌数も示した。

- ・ 洛北雑詠
 - 「炉辺感慨」から9首（神杉）
 - 「十二月八日」から11首（神杉）
 - 「春日籠居」「鶴の歌」「鶯の歌」「鯛を焼く」から各1首ずつ計4首（神杉）
- ・ 続洛北雑詠
 - 「唄づくり」から12首（金泥）
- ・ 聖戦抄
 - 「たたかひ」から7首（神杉）
 - 「九軍神を思ふ」から4首（神杉）
 - 「微臣謹詠」から5首（神杉）
 - 「籠居述懐」から4首（神杉）

「撃滅」から3首（神杉）
 「山本元帥を悼む」から7首（神杉）

- ・ 神楽歌
 - 「伊勢の神宮」から9首（神杉）
- ・ 病床沈吟
 - 「祖父を思ふ」から9首（神杉）
- ・ 芸苑遺韻
 - 「栖鳳を悼む」から5首（金泥）
- ・ 羈旅余情
 - 「鉄斎遺墨」から6首（金泥）
 - 「旅ごころ」から9首（金泥）
- ・ 先達讃歌
 - 「俵屋宗達」から7首（金泥）
 - 「松尾芭蕉」から7首（金泥）
 - 「僧良寛」から7首（金泥）

以上、『神杉』『金泥』の主な出典となった四つの歌集の概要を示し、どの歌題から選歌されたかを一覧した。出典にある歌題は『神杉』『金泥』では歌集の構成に合わせて一部が変更されているものの、大半は同じ歌題のまま収められている^③。

四 『神杉』『金泥』の歌題と構成

『神杉』『金泥』いずれも、複数の歌のある歌題でまとめて収めている。出典にある歌題の大半を生かしつつ、新たな歌集として再構成したということである。この歌題を一覧するだけでも両者の内容の違いが見て取れる。

■『神杉』にある歌題

大詔渙発	捷報来	国を思ふ	防人の歌
壬午新春	新雪抄	炉辺の歌	暁闇端座
軍神を思ふ	南洲遺訓	比叡山	友と語る
一月八日	こころ足る	明治神宮	祖先の墓
神武天皇祭	南方の友へ	豆腐の歌	熱田鳴神
祖父を思ふ	山本元帥を悼む	たたかひ	
微臣謹詠	伊勢の神宮	籠居述懐	虫声唧々
印度を思ふ	再び炉辺の歌	撃滅	十二月八日
閑居雜詠	巻後に		

■『金泥』にある歌題

鷹が峰	本阿弥光悦	真葛が原	大雅堂
羅漢図	俵屋宗達	大徳寺	千利休
落柿舎	松尾芭蕉	旅ごころ	良寛を思ふ
神光院	蓮月抄	塙つくり	揮毫元元
栖鳳を悼む	栖鳳の冬	こころ足る	巻後に

このうち、「巻後に」は正確には歌題ではなく、全体の末尾につく「後記」にあたるものである。しかし、ここに文章はな

く歌一首と奥書・署名のみなので、便宜上同列に扱った。さて、右を見てわかるように、〈決戦歌集〉という企画に

じた『神杉』の歌題は戦時色が濃い。例えば、冒頭の「大詔渙発」（九首）は、昭和十六年十二月八日の真珠湾攻撃に際して発せられた開戦の詔勅に接した詠である。この後にも、「軍神を思ふ」「南方の友へ」なる題が見え、「たたかひ」「撃滅」といった戦争そのものを想起させる歌題もある。

これに対して、『金泥』では、光悦・大雅・宗達をはじめ、芸術に生きた人物やそれにちなんだ歌題が並んでいる。すでに見たように、『金泥』にとられた歌の半数以上は『京洛史蹟歌』からであった。⁽⁴⁾

こうした歌題の違いを踏まえて、次節以降では、『神杉』『金泥』に含まれる歌について、出現に偏りのある語句を見てゆく。

五 『神杉』のことばと歌

叢書〈決戦歌集〉の一冊として編纂された『神杉』は、出現する語句が戦中らしさを醸成している。以下、『神杉』に多く、『金泥』にはないか、あってもごく少数という語句の例を挙げる。

掲出する用例は以下の方針で示す。『神杉』では、田坂・南里・福田（二〇二〇）において原資料を厳密に翻刻した本文を

もとにする。『金泥』は単行本を参照した。いずれも、仮名は歴史的仮名遣いのままにし、漢字は通用字体に改めた。振り仮名は原則として省略するが、読みにくいときはその限りでない。歌の下に括弧に入れて、歌題と、私に振った歌順番号を示した。

1 たたかひ・たたかふ・いくさ(戦)

「たたかひ」「たたかふ」は名詞と動詞という違いはあるが、互いに派生語であり同類のものとして扱う。以下、こうした派生語と捉えられるものは同様に処理した。

さて、「たたかひ」「たたかふ」は合計で28例を数える。そもそも歌題に「たたかひ」(七首)があったが、その他の箇所でも二〇首を超えることになる。

勝たむ勝たむかならず勝たむすめらぎの御稜威みらいつの下にわれ
ら戦いくさふ (大詔渙発・三三)

国こぞり戦いくさふ大きな年明けて歌びとわれも心きはへり

(壬午新春・三二)

たたかひを思へば厳し窓の外の比叡も山肩あげにたらずや
(たたかひ・一二七)

また、「いくさ」は13例ある。派生語「みいくさ」「みいくさ
がみ」も含む。「たたかひ」「たたかふ」と合わせて、二割程度
の歌に及び、歌集全体に存在している。

火もあらぬ炉の辺にありてこの朝や遠き呂宋るせんのいくさ思は
む (暁闇端座・五四)

一方、『金泥』では「たたかひ」が1例あるのみで(後述)、
「いくさ」は用いられていない。

2 かみ(神)

見出しでは単に「かみ」としているが、これも様々な派生語
があり、「みおやがみ」「やをよろづかみ」「なるかみじま」な
どを含む。26例を数える。『金泥』では用いられない。

ひむがしの垂細垂の空に茜さし神のみいくさいまか戦ふ
(捷報来・一八)

御祖神みおやがみををろがみたまふ現津神あきつかみをさらにをろがみかしこむ
吾は (微臣謹詠・一三四)

3 かしこ・かしこし・かしこむ(畏)

「あなかしこ」などの形も含めて12例を数える。右に挙げた
一三四番歌もこの例に含まれる。『金泥』になし。「かみ」や
「たたかひ」とも共起しやすい。次の七七番歌は真珠湾攻撃の
ひと月後を詠んだもの。

あなかしこ去年の師走のこの夜あけ朝まだきより歴史変り
ぬ (二月八日・七七)

たたかひの中にあれどもかしこしや神武の祭この日したま
ふ (神武天皇祭・九七)

かしこしや兵の姿に身をかりて八百万神たたかひたまふ

(籠居述懐・一四九)

すでに見た用例にもあるように、この戦争は神国日本が神の名のもとで遂行している聖戦ととらえられていた。銃後にある臣民はかしこみ、いくさの勝利を祈るという趣旨である。

4 おほちち(祖父)

合計11例。『金泥』にはなし。歌題「祖父を思ふ」の九首すべてに用いられ、他の題に2例がある。

薩摩湯祖父^{おほちち}生れし土の香をおもひつつ聴く友の言葉を

(友と語る・七六)

祖父が国をおもへる歌書きし短冊を見てわがこころ足る

(こころ足る・八四)

国のため吾にも起てとか病みてなほ祖父を見る夢ただならず

(祖父を思ふ・一一二)

おほちちの戊辰のころの胸痛み心いたみを思ひつつぞ病む

(祖父を思ふ・一一六)

ここまで見た語句と異なり、戦意高揚と直接つながらない、個人的な感懐からの語のように見える。ただし作者の場合、単にそれだけでもないようで、天皇とのつながりを押さえておく必要がある。

吉井勇の祖父、吉井友実は薩摩藩の武士で、西郷隆盛・大久

保利通らと親しく、戊辰戦争にも従軍している。さらに維新後は明治天皇の近臣として仕えていた。維新の功で伯爵に叙せられている。

時代は移り、この太平洋戦争は昭和天皇のもとで戦っている。祖父の代から帝に仕えているという認識が、作者の愛国精神の一部を形成しているのである。そう考えると、出典の『玄冬』で「病床沈吟」の章にある「祖父を思ふ」(十首)を、ほぼそのまま取り込み、愛国歌の一部として扱うことも不自然ではない。『神杉』の中程の歌題にある「明治神宮」「祖先の墓」「神武天皇祭」からの流れも考慮すべきであろう。もはや、出典の『玄冬』にあるときのように、病の床でのさまざまな感懐を詠んだ日常詠とは異なる価値を与えられているとみることができ。

5 きびしく・きびしき・きびしさ(厳)

形容詞類では3の「かしこし」のほか、「きびし」の例が偏っており、「きびしさ」も合わせて9例が『神杉』にある。『金泥』にはない。

比叡はかく厳しき面をして立つや十億劫の昔よりなほ

(比叡山・七三二)

たたかひは厳し提督身みづから敵に当りて死なさせたまふ

(山本元帥を悼む・一二二)

たたかひは日ごと厳しくなりて来ぬ腕組み思へば老も忘る
る
(たたかひ・一三三)

右の一二三番歌は、連合艦隊司令長官の山本五十六の戦死を悼んだもの。一三三番歌は、出典の『玄冬』によると昭和十八年夏の歌とみられる。当時は情報統制下にあったにせよ、徐々に戦況の厳しさが感じられるようになっていたのであろう。

以上見た語彙は、いずれも『神杉』に偏って用いられているものであった。4の「おほちち」を除いて、歌集全体の雰囲気形成する役割を担っているとみてよいであろう。

6 すがし・すがすがし(清)

こうして形成された歌集の基調のもとに、歌題の配置によって全体が構成される。ここで、四節で示した『神杉』の歌題を確認したい。(『決戦歌集』の一冊とすべく、作者は何を用意したのだろうか。

選歌の作業は昭和二十年七月末、普通に考えれば、すでに日本の敗戦は時間の問題に思われる時期であろう。選歌材料の歌集には昭和十八年秋までの歌がある。ここから何を選択するかを考えたとき、作者は真珠湾攻撃に象徴される緒戦の勝利に関する歌を歌集の背骨にしようとしたようである。

前述のように、冒頭の歌題「大詔渙発」は開戦の詔勅を詠んだものであった。「軍神を思ふ」は、もと「九軍神を思ふ」で、

真珠湾攻撃で特殊潜航艇に乗り組み戦死した兵士を詠んだもの。(昭和十七年)「一月八日」とは、太平洋戦争開戦にちなんで毎月八日に設定された、初の大詔奉戴日である。真珠湾攻撃を指揮した山本五十六は昭和十八年四月に戦死し、このことを「山本元帥を悼む」で詠む。そして、末尾近くの「十二月八日」は開戦一周年の記念日ということである。

戦死者を称える「軍神を思ふ」や詠歌時期としては後になる「山本元帥を悼む」を中程に入れ、「十二月八日」を後に回すことで、首尾一貫させようとした。大勝利の記憶を新たにしようというねらいがあったか。

さらに、これらに関する歌で目立つ語がある。『神杉』では「すがし」「すがしさ」「すがすがしさ」が計7例あるが、うち5例が集中する。

八隅知^{やすみし}之^しわが大君のみことのり唱ふすなはち身ぬちすがしも
(大詔渙発・九)

世はとみにすがしきかなや真珠湾のたたかひの朝水仙を剪る
(捷報来・一〇)

十二月八日の朝のすがしさをいまだ忘れず比叡の空見る
(十二月八日・一七三)

みことのりくだるすなはち海のうへ霹靂鳴れりすがしきかなや
(十二月八日・一七五)

その朝のすがすがしさはわが庭の竹に聴くべし石に聴くべし
 (十二月八日・一八〇)

一年後の十二月八日でも、右の三首のように一貫している。歌集としてまとまりをつけようとする意図を汲みとってよいであろう。

しかし、編纂を行った昭和二十年、山本元帥はすでになく、齢六十となった作者には、静かに事態の推移を見守るしかなかった。

六 『金泥』のことば

本節では、『金泥』に偏る語彙について簡単に記述しておく。用例は割愛するが、必要に応じて田坂(二〇一九)で示された歌集本文を参照されたい。

『金泥』では古人の名を繰り返し詠んでおり、その遺徳を偲ぶ歌が多いということが確認できる。具体的には次のとおり。5例以上あるものを示す。すべて『神杉』には詠まれない。

「光悦」15例	「蓮月」14例	「大雅」11例
「鉄斎」8例	「利休」7例	「良寛」7例
「栖鳳」7例	「宗達」6例	「去来」6例
「芭蕉」5例	「落柿舎」5例	

「落柿舎」はもちろん人名ではないが、去来や芭蕉との関係で同列に挙げた。これらは四節で示した『金泥』の歌題に見えるものがほとんどである。

このほか、目立つところでは「羅漢」12例がある。これも11首までが歌題「羅漢図」の歌である。この箇所は『朝影』鑑賞余響「大雅堂羅漢図」からの採録で、詞書もほぼ踏襲し、「初秋の一日京都博物館にゆきて、大雅堂描くところの五百羅漢の大幅を観る」とある。

また、「絵」も『金泥』にしか詠まれない。「蒔絵」「屏風絵」「ふすま絵」「墨絵」といった形も含めて、27例を数える。光悦や利休、蓮月との関係で「もひ(塊)」12例も目立つ。ほか、例が多いものに、「旅ごころ」9例がある。『玄冬』羈旅余情の「旅ごころ」一三首からの採録で、歌題もそのまま踏襲している。

こうした例を見ると、絵画や陶芸に親しんだり旅心に思いをせたりといったことは、平和な世にあつてこそのように思われる。しかし、いずれの歌も戦時に詠まれた歌の再録なのである。

終戦直後に編まれた『金泥』は、既存の歌をうまく利用し、戦時色を消した集として成立している。歌集としての規模が小さく歌数も少ないということがあるが、吉井のように幅広い詠

歌を持っていれば、ある程度自在に編纂できたと思われる。

その他、形容詞類も見ておこう。「さびし」18例に対して、『神杉』で3例と、大きな差がある。また、「したし（み・く・き）」が5例に対して『神杉』なし、「なつかし」5例に対して『神杉』1例といった偏りがある。詳細な検討が必要であるが、いまは事実だけを報告しておく。

七 『神杉』『金泥』の底流にあるもの

前節まで、二つの歌集の性質が異なることを前提に、使用された語句の偏りを見てきた。使用された語彙の差異が確認できたとと思われる。表面的には、作者の愛国精神が両者異なる方向に発揮されたものと捉えることができよう。

しかし、終戦の前後で世の中が大きく変わったからといって、ひと月程度の間で、齢六十の老歌人の、意識の根底にあるものがそう変わるだろうか。歌集の端々に変わらない部分がありはしないか。

ここで、試みに歌とその表現から検討する⁽⁵⁾。両者の底流の部分にある、隠れた共通点、連続性を探ってみたい。

まず、両者の連続性を思わせる要素として、末尾の「巻後に」の歌が同じという点がある。

われすでに鬢白めども三越路の中つ国辺にやはか老いめや

(神杉・一八八／金泥・一八三)

この歌の後にある奥書も、編纂時を示す「仲夏」「初秋」が異なるだけで、ほぼ同じ内容である(「八尾」というのは疎開先)。

昭和乙西仲夏越中國八尾町客寓にて(神杉)

昭和乙西初秋越中八尾の客舎に於て(金泥)

『神杉』が結果的に没になったため、その「巻後に」を流用したかのように見える。しかし、作者の意識が変化していない、同じであるため、あえて変更する必要もなかったのである。

ここで触れておかなければならないのは、『神杉』『金泥』で共通する歌題「こころ足る」である。『神杉』では中程に六首、『金泥』では末尾に二三首が配置されている。

この歌群は、いずれも『朝影』洛北籠居「こころ足る」の三八首がもとになっている。洛北籠居の章の冒頭には、「洛北のわが廬は貧しけれど樂し。家に炬あればその傍に在りて、読書黙想に夜の更くるを忘れ、戸外に風雨の迫るをも覚えず。かくて日日を籠りる身に、今さら何の閑居の箴ぞや。」とある。籠居の身にあつて日々の感懐を歌にしたもので、「京の春寒」「机辺の歌」などといった一六の歌題のもとに一六五首の歌が収められている。

このうち「こころ足る」には、すべて結句を「わがこころ足る」で止める歌が収められる。歌を題(テーマ)で縛るのではなく、結句の表現のみで縛るという連作である。したがって、そこには様々な思いを陳べることが可能になる。

そして、洛北籠居の章のうち、『神杉』『金泥』ともに歌をとったのは「こころ足る」からだけであった。洛北籠居の章の歌は基本的に日常詠といえるが、「こころ足る」では雑多ともいえる感懐が詠まれ、戦時下らしい勇ましい歌もあれば日常の他愛ないものまであつて振幅が大きい。ここから、歌集の構成に合わせて使えろと考へた歌をとつていたのであろう。

さて、二つの歌集で配置された位置は異なるが、共通する歌が三首ある。すべて挙げる。

はだらはだら髪白めばか慷慨の歌もつくらずわがこころ足る
(神杉・八一／金泥・一六一)

夜ふかく祖国のよさを書きし文読み耽りつつわがこころ足る
(神杉・八二／金泥・一六三)

いきどほろしきこと思ふ日も遠天の雷聴けばわがこころ足る
(神杉・八六／金泥・一六九)

『神杉』八一番・『金泥』一六一番歌がいう「慷慨の歌」の、その憤りの内容は具体的に示されないが、八六番(一六九番)歌にある「いきどほろしきこと」と通じるものを思わせる。戦の

世にあつての憤りは戦争末期であつても敗戦後であつても、そう変わるものではなからう。この慷慨の歌を作らず満足していることを自分が老いたからかと詠み、天意を思わせるような遠雷の音で慰められてもいる。また一方で、八二番(一六三番)歌のように、深夜にわが国のよさを記した書物を読むことによる満足もある。

二つの歌集では、同じ歌題「こころ足る」でも、そこに収められた歌は右の三首以外異なる。そもそも歌題の配置が異なるので、使われ方も異なると考へるべきであらう。しかし、歌に表出されている意識は、通底するものがあるのではなからうか。この三首を共通して選んだのが、意図してのことだったか結果的にそうなったのかはわからない。いずれにせよ、使うと判断されたこの三首は、戦中でも戦後でも歌集の要素になりうる質を持っていたのである。

参考までに、資料として、註の後に歌集『朝影』から「こころ足る」三八首すべてを掲出しておいた。

では、他に『神杉』『金泥』に共通する意識の表出された歌はないだろうか。最後に、その一端が窺える例を拾つてみる。

第五節の1で「たたかひ」などの語が『神杉』に偏っているということ述べた。一方、ただ一例であるが、『金泥』にもある。

桃山の城にひとりの利休ゐてなごやかにやたたかひの世も

(金泥・千利休・七一)

『京洛史蹟歌』古寺巡歴「千利休」からの採録である。「桃山の城」というのは豊臣秀吉が築いた伏見城のことであろう。この文脈で読めば、「たたかひの世」は織豊時代の戦国の世を指しているであろう。「ただ一人、利休がいれば戦国時代でもなごやかなのだよ」と。しかし、これを太平洋戦争中に置いてみると、今般の戦争と重なって読めてしまう。戦後すぐの『金泥』でも「たたかひの世」であることは変わらない。今に続く日本文化の精髓を思えば、大変な国難の時代でもなごやかだと言っているかのようである。

ひるがえって、『神杉』にも、同じ「たたかひの世も」を持つ歌があった。

たたかひの世も夢殿の観音は笑みいますらむ春をしづけく

(神杉・閑居雑詠・一八四)

戦の時代にあつても、悠久の時を経て観音像は変わらずほえみをたたえ、春のしずけさとともにある。『神杉』の末尾近くに配置されたこの歌⁽⁶⁾など、先に引いた『金泥』七一番歌と同様の趣があるように思われる。『金泥』の歌の「なごやか」が、この歌の「しづけく」に相当する。まったくの別語で意味も異なるが、「たたかひの世」と共起することで、作者の希求して

いたものを暗示しているようである。

このように、旧作をもとに二つの愛国歌集を編んだ作者の心の内には、「なごやか」「しづけし」で表現されるような、穏やかさ、落ち着きといったものを取り戻したいという思いがあった。それがいくつかの歌に共通してにじみ出ているのである。

ちなみに、「しづけく」「しづけさ」などの語は、『神杉』に6例、『金泥』に9例ある。両方の歌集に一定数用いられている形容詞類は他に見いだせない。以下、『神杉』から三首、『金泥』から一首引いてみる。

とどろとどろ雪雷も鳴り出でよいくさある世に似ざるしづけさ

(神杉・新雪抄・四二)

たたかひに心きほへどやうやくに老の境のしづけさも知る

(神杉・炉辺の歌・四六)

仏陀ここに生まれましし日のしづけさに印度の民をかへさせ

たまへ (神杉・印度を思ふ・一五八)

わがこころしづけくなりぬ襖には探幽の鷺白くねむれる

(金泥・大徳寺・六二)

このうち『神杉』の歌を見ると、四一番では戦の世と思われる「しづけさ」を感じ、四六番では老境に至ったわが心の「しづけさ」を知る。一五八番ではインドの民衆を思いやり、釈迦

が生まれたころの「しづげさ」に戻せという。いずれも、戦時下を支配する世情とは対極にあるものといえよう。

八 まとめ

本稿では、吉井勇の『神杉』『金泥』という二つの歌集について、一方に偏在する語彙を示し、それをもとに考察した。

この二つの歌集の編纂にあたって、吉井は叢書の企画に感じられる歌を選び、歌集として構成しなければならなかった。手持ちの材料をもとにごく短期間で作業を行うのには、多少の困難もあったと思われる。

とはいえ、おもな選歌材料となった四つの先行歌集には、様々な内容の歌が含まれていた。歌数も合計二五四〇首あまりと、かなりの数に上る。このような背景があれば、対応は可能であった。例えば、『金泥』の半数以上の歌が『京洛史蹟歌』からとられたというのは、戦時下らしい歌を外し、歌集としてのまとまりをつける手段であつたらう。

そうして、戦時中の『神杉』と戦後の『金泥』とは、まったく異なる趣の歌集となった。時局の変化に応じて企画も変わったので、選歌態度を極端に変更した結果である。いずれも愛国心の発露による歌が主体という点は同じかもしれないが、ここ

まで語彙や歌が異なってくると、そればかりが目についてしまう。

しかし、そうした明確に異なる部分を引き剥がしたところこそ、連続性が見えてくる。そういう意味で、『金泥』末尾の「こころ足る」二三首は重視されてよいであろう。⁽⁷⁾ この二三首につながるものが『神杉』にも含まれていた。

このほか、用語の面から作者の意識として両者で通底する部分を見いだそうと試みた。「しづげ(く・さ)」の使用はその一つの事例である。

附記

本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」(同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究(二〇一九～二〇二二年度))、「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」(科学研究費助成事業基盤研究(C) 課題番号20K12465、二〇二〇～二〇二二年度)における研究成果の一部である。

田坂憲二氏には『朝影』『金泥』の単行本を提供していただいた。あつくお礼申し上げます。

また、『神杉』『金泥』の歌の用例の収集にあたっては、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)による文字列解析ツール、eCSAを使用した。あつくお礼申し上げます。

註

- (1) 京都府立京都学・歴史館所蔵。この全文翻刻と出典・異同などを、田坂・南里・福田(二〇二〇)で示した。
 - (2) いずれも今回数えたところによる歌数である。田坂(二〇一九)では『京洛史蹟歌』から93首、『玄冬』から54首とする。
 - (3) ここでは詳しく触れなかったが、出典の歌題を変更して収められた歌は、『神杉』は田坂・南里・福田(二〇二〇)で、『金泥』は田坂(二〇一九)で参照できる。
 - (4) 『金泥』の構成意識については、田坂(二〇一九)に言及がある。
 - (5) 二つの歌集の編纂作業について作者が言及している資料があればよいが、いまは歌集の内部徴証だけを考察の対象にする。
 - (6) この『神杉』一八四番歌から一八八番歌の五首については、田坂(二〇二〇)に言及がある。同じ〈決戦歌集〉の一冊、斎藤茂吉の『萬軍』の末尾の五首との比較の中で、(吉井の歌は)「静かに自己の世界に沈潜していく姿勢が極めて顕著である」という。
 - (7) 田坂(二〇一九)に『金泥』「こころ足る」歌群の異質さに着目した言及がある。
- 【資料】歌集『朝影』洛北籠居「こころ足る」三八首
『神杉』『金泥』が選歌対象とした『朝影』の「こころ足る」の歌をすべて掲出する。本文は『朝影』単行本によるが、漢字は通

用字体に改めた。『神杉』だけがとった歌に●、『金泥』だけがとった歌に○、両方がとった歌に●を附した。

- 鉄鉢の絵など描かむと思ひつつ紙に向へばわがこころ足る
- はだらはだら髪白めばか慷慨の歌もつくらずわがこころ足る
- 或るときは己がかたくなを寂しめど遮莫わがこころ足る
- 夜ふかく祖国のよさを書きし文読み耽りつつわがこころ足る
- 出がらしの番茶に咽喉を潤ほしてあくらる居ればわがこころ足る
- 友の描きし愚庵の姿ながめつつ念仏申せばわがこころ足る
- 古裕脱ぎたるのちのさはやかさ空を仰げばわがこころ足る
- 目を閉ぢて風にうごける竹林のさまを思へばわがこころ足る
- 筑紫路の旅にて得たる土鈴を振りみ鳴らしみわがこころ足る
- いきどほろしきこと思ふ日も遠天の雷聴けばわがこころ足る
- いにしへのじやがたら文にあらねども消息書けばわがこころ足る
- もの読むものうき時は良寛の仮名文字見つつわがこころ足る
- 思ふこと遠くはるけし比叡が嶺を仰ぎてあればわがこころ足る
- しづかなる朝の寐覚めや雀子のこゑを聴きつつわがこころ足る
- わが思ひ知るは汝のみと庭隅の石にも言ひわがこころ足る
- はるけくも唐天竺に伸びてゆく国つ力にわがこころ足る
- 為すこともあらぬひと日や仰寐しても思ひ居ればわがこころ足る
- 放庵の安土の寺のふすま絵の朴の葉も見つわがこころ足る
- 朝ごとに厠にありて竹の葉のそよぐを聴けばわがこころ足る
- あかあかと百日紅の花の咲くころを思へばわがこころ足る
- 魚の骨舌に触れど口馴れし煮ものの味にわがこころ足る
- 年毎のわがわびずみのならはしに糸瓜植うればわがこころ足る

●祖父が国をおもへる歌書きし短冊を見てわがこころ足る

○わびずみは寂しけれども朝歩き夕ありきしてわがこころ足る

杏花忌の香のほひを時にふとなつかしみつつわがこころ足る

古机据ゑたるままに夜を幾夜ものは書かねどわがこころ足る

●胡麻あへの菊菜うましと食うべては夕餉楽しくわがこころ足る

昨日七つ今日十あまり手づくりの苺もぎつつわがこころ足る

水音は聴くによろしも白川の川辺に立てばわがこころ足る

○妹が読む宮本武蔵吾も読みてひと日暮らしつわがこころ足る

○膝組みて蓐の剃杭撫で居ればうつらうつらにわがこころ足る

○夏の夜の衾さむけく時に痢を病むことあれどわがこころ足る

○みづからを嘲ける思ひ湧くことも稀にはあれどわがこころ足る

旅の歌書かむとおもひ磨る墨のほひ親しくわがこころ足る

すこやかに学びてありと書きてある吾子消息にわがこころ足る

淡ら日のさせる障子のしつけさをしばし見て居りわがこころ足る

人の世のうつらふを見るかなしみもいまは起らずわがこころ足る

闇ふかき愛宕の山にともる灯を夜毎に見つつわがこころ足る

参考文献

木俣修編（一九七七—一九七九）『定本 吉井勇全集』全九巻、

番町書房

田坂憲二（二〇一九）「吉井勇の歌集『金泥』について」『三田國

文』（慶應義塾大学国文学研究室）、第六四号

田坂憲二（二〇二〇）「吉井勇の幻の歌集『神杉』と〈決戦歌

集〉」『和歌文学研究』第一二〇号

田坂憲二・南里一郎・福田智子（二〇二〇）「新資料 吉井勇

『神杉』原稿 翻刻と校異』『社会科学』（同志社大学人文科学研究所）五〇巻二号